

# ナイアガラタイムス

2023年6月10日 第14号

人 カ 夢



## 目次

- 名盤探検隊⑬ 【フォーエバーヤング】吉田拓郎(1984年11月発売) ……2
- シネマ滝⑪ 【バクマン。】(2015年10月公開) ……3
- THE 極み 【車椅子・中国・そして人】太田哲良さん ……4
- 美味しい話⑪ jam ル【古淵のパン屋さん】 ……7

## 【名盤探険隊⑬】吉田拓郎「フォーエバーヤング」（1984年11月発売）

前回のこのコラムが陽水だったから、今回は拓郎でいこうと思う。けれど滝はこのアルバムしか聞いた事がない。あまり拓郎の事も知らない。だが好きなアルバムである。

この作品は、滝が高2の時に発売された。担任が陽水や拓郎のファンだった。きっとその影響で聞いていたのかもしれない。その恩師は何年か後に、ご両親の介護のために、家族で愛媛の松山に引っ越した。滝が23歳の時に参加した車イス全国市民集会在松山であって、再会して家にまでお邪魔したなという思い出が頭の中を駆け巡っている。

それはさておき、このアルバムと拓郎の事（滝も知らないから調べながらだけど）を書いてみよう。

吉田拓郎、昭和21年4月鹿児島に生まれる。大学時代からビートルズのコピーバンドを結成し、広島のリブハウスで活動していた。当時はベンチャーズのコピーバンドが多く、歌うアマチュアバンドは少なかった。中国地方のコンテストでは2位、全国では3位。広島の繁華街を歩くだけで人だかりが出来る。地元ではデビュー前から人気があった。

そしてデビューした。1960年代に学生運動が起こり、若者達が社会に対し向かっていこうとしていた時代だった。その頃、口ずさまれた歌はメッセージ性があるものが多かった。それに対し拓郎は、「結婚しようよ」とか「旅の宿」のように日常を描いた曲が多かった。その後のフォークやニューミュージックの土台をつくったのは、この人なんだろう。「夏休み」という曲があり、広島原爆投下に対するメッセージソングではないと言われていたが、本人は「ただひたすらに子供時代の夏の風景を歌っているだけだ」と否定している。

さてこのアルバム、何回も繰り返し聞いているのだが全く飽きがこない。それだけ完成度が高いということなんだろう。これは拓郎が38歳の時の作品。少し疲れてきたが、世の中の事は分かってきた。そんな世代の感情を映す楽曲がちりばめられている。

拓郎を聞いてみようかなという方におススメしたい1枚である。



## 【シネマ滝⑪】『バクマン。』（2015年10月公開）

今から8年前の秋、映画館でこの作品の予告編が流れていた。その時、滝の脳裏に「どうしても見たい映画」として残っていた。橋本で上映の最終日、たまたま滝が見れる時間に上映される事を知り思い出したように見に行った。そんな覚えがある。

この作品は、週刊少年ジャンプに夢をかける若者達の映画である。見ていると最高に気持ちがいい。

ある日、マンガ家になりたいという夢を持っていた秋人（シュージン・神木隆乃介）は、中学時代から絵の上手さに惚れ込んでいた最高（サイコー・佐藤隼）に「二人でマンガ家にならないか、ただオレは絵が下手だ、けれど文才はある。小学校の時に作文で文部科学大臣賞だって取った事がある。お前は絵が得意だろ」と誘う。最初は乗り気じゃなかったサイコーものめり込んでいく。

始めに二人で手懸けたのは「ダブルアース」というSF作品。二人でなんとか書き上げジャンプの編集室へ持ち込む。編集者の服部（山田孝之）は、それに目を通し「これが初めての作品か」という驚きを隠しながら、「指摘したところを直して、もう一回持ってきて」と言う。二人は手直しをし、再度編集室へ。服部は「これはいける」という顔をし「手塚賞に出してみないか」という。

手塚賞では佳作に選ばれ、ジャンプにも掲載される。けれど、そこからがうまくいかなかった。服部から「自分達らしいマンガをもう一回考えてみる」と言われる。サイコーは「自分らしいって、なんですか」と聞く、服部は「そんなものは分からない。なにが売れるかなんて、もっと分からない」と言われる。

ある日、学校の体育館で二人でポーズとしていたら突然シュージンの頭の中に作品がおびてくる。それは自分達の日常を未来に置き換えたマンガ「この世は金と知恵」だ。これでジャンプの連載を勝ち取る。

だが、ここからが闘い。容赦なくせまってくる締め切り、連載がいつ打ち切りになってもおかしくないジャンプ特有の読者アンケート主義、そして自分達の力の無さ。やがてサイコーは疲労で倒れ入院してしまう。編集長からは「来年の春まで休載。これは決定事項だ」と告げられる。

サイコーは、また立ち上がり締め切りに間に合わせようと書き始める。それを聞き若きマンガ家達が二人の仕事場に集まり描き上げていく。それは爽快でたまらない。そんな映画だ。



## THE 極み 『車椅子・中国・そして人』 太田哲良さん

今回の「極み」は、八王子の車椅子メーカー「ジーピー」の太田さんに取材させて頂いた。

今まで滝は、このコラムは身近に当たり前にある物や職種を掘り下げて、トリビア的なものにするのがいいとばかり思い込んでいた。けれど、前回の太一さんの記事の反響を聞いたり、この原稿の編集していくうちに「それは違う、やっぱり人にフォーカスするのが大切なんだ」と当たり前の事に気がついた。

ちょっとしたきっかけで、始めた仕事に40年以上ものめり込んでいる太田さん。なにが彼をそうさせているのか、読んでみて下さい。

### 『何故、車椅子のメーカーで働く事になったのか』

国際障害者年1981（昭和56）年に日本で老舗の車椅子メーカーの北島商店に友達がいる「車椅子の仕事ってどういうものかな」と実習してみたら、自分に向いてると思いました。実習は今でも覚えています。神奈川県津久井やまゆり園で、ハンディがある人や子供さん達が寄ってきて、親しみがあるような、ないような。僕がハタチの頃に、そんな経験して「ちょっとやってみようか」と軽い気持ちで車椅子の会社に入りました。

### 『仕事の面白いところ』

色々な人に会える事これが一番です。長い方だと42年のお付き合いになります。子供の車椅子もやっていて、それも面白い。何故かというと、小学1年生2年生の車椅子を作って10年20年経つと、立派に仕事して活躍している人達もいる。今からちょうど10年前に小学6年生の男の子の車椅子を作って、その後、JR飯田橋の駅員になったという連絡があったり。そんな事がうれしくて、この仕事を続けています。

当時、相模原で障害当事者の作業所を立ち上げたK. Sさんと巡り合って、海老名や横須賀の当事者団体の人達を紹介してくれた。そこから輪が広がって今でもその人達とお付き合いがあります。

そんな中でやりたい事があり、今から14年前に会社を辞めて、独立して車椅子の小さな会社を作りました。やりたい事とは、サラリーマンだった頃は、ユーザー（僕で言うと友達なんだけど）の人達が車椅子で旅行したいとか車椅子以外の相談に時間内では乗ってあげられなかったんです。それが独立し、関わりがある作業所の日帰り旅行に誘われたらプライベートでお手伝いが出来たり、展示会に障害を持った子供さんが行く時に「太田さんサポートしてくれないかな」と言われて、そういう事もできる。

それから、自分がつくる車椅子を世に出したいという思い。自分で考えた車椅子が3機種、中国で製造していて、今とても幸せです。

こうやって滝さんに会える事も、歳を重ねると人に会うのがますます好きになってね。

### 『中国での仕事のこと』

前職が車椅子のニックという会社で、親会社のM i k i が2000年に中国に進出して上海に工場を作った。社長に「太田、向こうに行ってこい」と言われ、右も左も分からない中で初めて上海に行って少しずつ中国に慣れていった。日本の車椅子企業として初めて中国で

営業販売をすることになり、電車とバスと自転車で営業した経験があります。

当時は自家用車もなかなか手に入らないし、今のように車も与えられずに、地下鉄に車椅子を担いで乗って降りたらバスに乗るといような事だった。それから「早く欲しい」という電話があったら、バイクのうしろに車椅子をくくりつけてお客さまの所に持って行った事もある。現在、日本のメーカーは中国現地では車で営業しているようです。

中国とはそんな感じで今もずっと関わっています。コロナになる前は年に6回か7回は行っていました。僕が行き始めた2000年と今から3年前の2019年、この20年で福祉の業界は思いきり変わった。簡単に言うと、2000年頃は車椅子を押して外なんか走れないガタガタ道で、階段もすごくて、トイレなんて我々が探すだけでも大変だった。それが今は都市圏においては、かなりバリアフリーが進んでいて、エレベーターも完備され、中国の人の意識も大分変わってきた。ただし、外で車椅子を見かけるチャンスはまだまだ少ない。バリアフリーが20年前と比べれば進んできたけれど、まだまだインフラが整備されていない。ちょっと外に出るだけで「アレ、段差があって昇れない」って、立ち往生してしまう。だから車椅子の人が出掛けるというのは圧倒的に少ない。

大きく変わったのは、上海万博があって北京オリンピックがあった。あの辺から更に意識の変革とインフラの整備が進んでいった。上海万博で初めて障害者が関わるパビリオン「生命陽光館」というのが出来、私の知っている先生や私も協力した。意識の変革がそこから更に加速していった。中国の障害者、福祉関連の事情は、そんなところかな。

制度も少しずつ変わってきているんだけど、日本と違って補助があると言っても、そんな補助では生活出来ないレベル。

それから子供さん（障害児）の事情については、現場を見たんだけど、皆さん一生懸命生きている。それを支えているのは、ほとんどが親御さん。

今でも都市圏を離れると、明日のご飯も食べられないような人や、ガンだって宣告されても病院にも行かれないという話も聞く。

中国の事情はなかなか厳しいものがある。たしかに、この20年で良くなっている部分も沢山あるが、まだ影はある。

#### 『中学の悪友と会社を立ち上げる』

好きな事をやっていきたいと思ったのは40代の半ば。中学時代の悪友に「独立したい」と話したら、彼も同じ思いでたまたま一致した。僕は障害関連の車椅子を担当し、相方の前職は介護保険だったので、そちらの部門を担当している。だからウチの会社は小さいけれど、障害者関連も介護保険も出来る。コロナで倒れるかと思ったが、なんとか踏ん張ってやっている。

#### 『何故、車椅子の仕事をやっと続けているのですか』

それは、僕がハタチの頃に出来るかなと思った仕事で、好きになって色々な事を知っているという事。それから、さっきも言ったけれど車椅子の仕事をやっていると、いろんな人に会える。困っている人がいて自分が出来ない場合でも、誰かを紹介できる。たとえば、何十年も前に「車椅子で旅行に連れて行ってあげたいんだけど、行ける場所がなくて」と言われた事がある。当時は（今は、あるかどうかは分からないけれど）厚木にアルファ旅行会社と

いう僕の友達の友達がやっている会社があって、そこに相談するとなんでもやってくれた。そんなネットワークを構築していくと、やりがいを感じて辞められなくなる。

#### 『ニック福島営業所の立ち上げを手伝う』

相模原のK. Sさんが色々な事情があって故郷の福島に帰ってしまう事になる。その時(1989年の事)どっちが先に言ったかは忘れたけれど「車椅子売れるかな」とか「車椅子売って見ない」という話が出た。「できる事はやるよ」と言って何ヵ月かK. Sさんの奥さんと一緒に研修しながら営業にまわった。そのあと福島で立ち上げた。なかなか長くは続かなくてどこかの会社に吸収されたんじゃないかな。丁度、福島にニックの営業所がなくて、社長の了解を取って、福島営業所と銘打って旗揚げしたけれど、一番気にしていたのは遠いから僕がサポート出来なかった事。

#### 『最後に』

この仕事を長く続けていると、二十歳の頃に出会った車椅子の女性が、結婚して子供を産んで、その娘さんが大学に入るために引っ越しするのを手伝ったり。長い時間を共有出来る事。こんな営業マン冥利に尽きる事はない。



## 美味しい話⑪ jamル

今回は、南区古淵に4月にオープンした「jamル」というパン屋を紹介したい。

パン屋と言えば、店の前を通りかかるだけでいい香りに包まれ、中に入るとおいしいような物が並び幸せな気分になる。子供の頃、家の近くにあった「ピノキオ」のクリームパンやハンバーガーは今でも忘れられない。

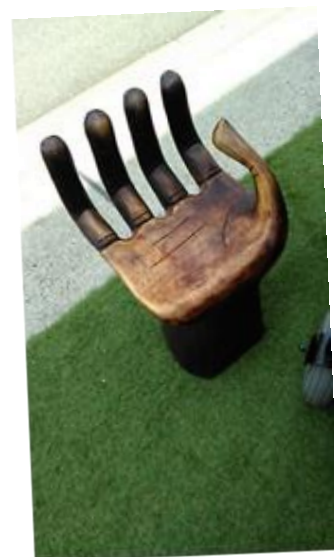
仕事場から古淵までは結構距離があり、ボランティアさんの自転車と滝の電動車椅子で5月のさわやかな風の中一時間弱かけてjamルまで行ってきた。

着いてみると、お客さんが沢山いて店先には畑で育てた野菜が100円で売られていて、これも人気だった。

ここは障害がある方達と一緒に働いている場である。代表の黒木さんに、話を伺う事ができた。彼は元々、訪問入浴の会社にいた。今から13年前ぐらいにそこを辞めた。そして東日本大震災があり被災地に行き、最初の1年間は自力で入浴が困難な方の支援をし、それが落ち着いた後、子供達の炊き出しへ。そこで「本当に人がその人らしく生きるとはなんだろう」と考えるようになり、こちらに戻り法人を立ち上げ、障害を持つ方達と畑仕事などを行っている。このパン屋jamルもその一環だ。

色々な種類のパンがあるのだが、滝が食べたのはクリームパン。発酵に特別な工夫がされているのではないかと思うほど生地がモチモチでおいしかった。

今はまだ、週末だけの営業だが、金曜日に古淵周辺に来られた時は、是非。おいしいパン屋です。



## 編集後記

4年ぶりの行動制限がないゴールデンウィーク、テレビには行楽地にむかう人達が映しだされていた。それを見ながらいつもの日々が戻ってきたんだなと思い、なんだかホッとした連休だった。昨日おとといは新緑寒波で肌寒かったが、これから1年の中で最もいい季節がやってくる。自然の恵みを感じながら思いきり生きていこう。

実はこの編集後記、いつもはすべてのコラムを上げてから書くのだが「美味な話」の取材はあさっての予定。なのに何故、今これを書いているのか。それは「名盤探偵隊」に書いた「集会」と「恩師」のワードを検索してみたら驚いたり考えさせられたり。で、それを皆さんに伝えたくなくなったから。

まずは「集会」から。滝が行ったのは（91年）第10回で隔年開催。73年から始まったこの集会は、60年代からのアメリカで起こった自立生活運動の考え方を日本に広めていったと書いてあった。つまり滝の頭の中に染み付いている生きていくための理論はここからきているのだと改めて知り、胸がやたら高鳴った（興味がある方は「自立生活運動」と検索してみてください）。

次に「恩師」。先生のファーストネームが特徴的なので「もしかしたら」と思い先生の名前を検索してみた。そしたら松山で「こころ塾」という精神疾患の方のためのNPOの塾長をなさっていた。さっそく電話し10分ぐらい話せた。先生は滝の事は覚えていたが、松山で会った事はまったく覚えていなかった。横浜の教え子が会いに行ったのは滝ぐらいなのにと思ったけれど仕方がない。これからつながりが出来たらいいな。

これから暑い夏がやってきます。夏バテせずに乗り切っていきましょう。

### 発行所

〒252-2042 神奈川県相模原市中央区横山 4-5-4-107

発行責任者 大滝英史

MAIL nb060234-1625@tbk.t-com.ne.jp

☎ 042(755)9105

### 発行協力

社会福祉法人アトリエ 一から百まで堂

〒252-0235 神奈川県相模原市中央区相生 4-13-5

感想などのメールはこちらまでお願いします



### 振込先

フク)アトリエ

ゆうちょ銀行 ○九八(098)店

普通 1208349

記号番号 10960-12083491

読んでみて『面白い』と思ったら振り込みをお願いします。

これはメンバーの工賃になります。